

アクティブ・ラーニング型授業の一手法としてのキャリアインタビュー

草野 美智子*

Career Interview-As One of the Methods of Active Learning

Michiko Kusano*

We report the contents of our Career Interview, one of the methods of active learning, and the results of questionnaire to the students. The students who had the interview show remarkable changes in the consciousness of their own careers. Also, the interview develops the students' ability in communication effectively. Their ability of making presentations, however, varies greatly between individuals. We mention the necessity of giving the students more opportunities of making presentations in public.

キーワード：キャリアインタビュー, キャリア教育, アクティブ・ラーニング

Keywords : Career Interview, Career Education, Active Learning

1. はじめに

学校教育においてアクティブ・ラーニングの多様な手法が模索されている。本論文では、アクティブ・ラーニングの視点からキャリア教育をとらえ、効果的に実践するための手法としてキャリアインタビュー（成果報告会を含む）を行った結果を報告し、同手法の有効性と今後の検討事項を考察する。

2. キャリアインタビュー

2.1 キャリアインタビューの目的

本論文におけるキャリアインタビュー（成果報告会を含む）とは、社会人の経歴や仕事を選んだきっかけを学生が直接聞くことで、①働くことについて関心を高め、将来設計のヒントをつかみ、職業選択やキャリア形成に貢献すること、②インタビューの仕方や言葉のキャッチボールの方法を体験し、見知らぬ他人や異なる世代との話し方や社会人としてのマナーを学び、さらに成果発表のやり方を学び、実施することを目的としている。

①の目的からは、多様な社会人の存在を知ること、多くの視点に気付かされることが予想される。また自ら主体的に判断してキャリアを形成していく「キャリアプランニング能力」や、自分自身の可能性を肯定的に受け止め主体的に行動する「自己理解・管理能力」を身に付けることが期待される。

②の目的からは、情報発信力を高めることが期待される。

* 共通教育科

〒861-1102 熊本県合志市須屋 2659-2

Faculty of Liberal Studies

2659-2 Suya, Koshi-shi, Kumamoto, 861-1102, Japan

人に話を聞く取材力やコミュニケーション力、簡潔で正確に報告する文章力、さらに、発表時にユーザーインターフェースを意識した、文字サイズや、統一感がありデザイン性も高いページ設計を考慮する力にもつながる。

2.2 キャリアインタビューの方法

本キャンパスでは、4年生の国語の時間にキャリア関連授業を設け、キャリア教育に力をいれてきた。

キャリア教育の主な内容は、就職活動につなげるために、最初に「キャリアインタビュー」、続いて自分の棚卸と将来を描く「人生鳥瞰図」作成、そして最後にコミュニケーション能力を高めるために「公開番組～ゲストの話を聴こう」⁽¹⁾を行う

4年生の国語授業が後期開講のために、学生たちには、注意事項と下記の「インタビューと発表資料の要領」（表 1）を3年生の最終授業日で口頭説明を行い、4年前期期間中に数回メールで周知し、夏季休業中のレポートとして、キャリアインタビューを実施し、授業でその成果発表を行うことを指示した。

インタビューの注意点としては、目的を伝えて事前の許可を得る・アポイントメントの時間厳守とふさわしい服装・メモや録音を取るときの事前許可・掘り下げた話を引き出すために具体的に聞く、変化を聞く、比較して聞く・うなずき、ノンバーバルのあいづちの活用（うなずき、視線、表情など）・語彙的なあいづちの活用（会話のさしすそ「流石ですね」「知らなかった」「素晴らしい」「凄い」「センスありますね」「そうですね」）・インタビュー終了後のお礼の挨拶等を挙げた。

発表に際しては、発表に際して個人情報に伴うため、教

室内のみでの情報共有に留めることを、特に力説した。情報リテラシーが確保されず、せつかくのキャリアインタビュー本来の目的が台無しになってしまう恐れがあるためである。

インタビューと発表資料作成（5分間発表用）の要領については、表1の通りである。

表1 インタビューと発表資料作成の要領

目的	①働くことについて関心を高め、自らのキャリア形成に貢献する ②インタビューの仕方と成果発表のやり方を学び、情報発信力を高める
形式	任意の1人に対するインタビュー形式 対面式（face-to-face）でも通信式（電話などの通信手段活用）でも可。
質問内容	①インタビュー相手の「氏名」（実名でも仮名でも可）、「性別」「年齢」（正確に、または40代など）、インタビューとの「関係」
	②職種と内容
	③仕事に就いたきっかけや動機
	④（あったら）入社当時の面接や試験内容
	⑤働く意味や仕事のやりがい
	⑥（あったら）転職の経験（職種と理由）
	⑦今後社会に出るインタビューへのアドバイス
発表資料作成	標題=インタビュー中に語られた印象的な言葉とする。（例「ひたすら悩むべし」「周りをよく見て、自分を客観視する」など）
	質問内容①～⑦について、簡潔にまとめる
	インタビューを終えた感想を記す

3. キャリアインタビュー実施結果

キャリアインタビュー成果発表会後に、趣旨を説明したうえで、無記名でのアンケート調査を実施し、111人から有効回答を得た。回答者のうち男子学生は93人（83.8%）、女子学生は18人（16.2%）であった。

3.1 キャリアインタビューの相手

学生たちがインタビューの相手に選んだのは、多い順に表2の通りである。

最も多かったのは、父親40人で、母親15人と合わせて55人（49.5%）の学生が保護者にインタビューしていた。兄弟、叔父叔母をあわせて66人（59.4%）がインタビュー相手として家族または親族を選んでいる。今回のインタビューは特定の相手を指定したり推奨したりしたわけではないが、相手を見つける手間よりも、身近にいて話しやすい相手を選んだということだろう。夏季休業中であるため、単身赴任中の保護者の帰省や兄弟の休暇に合わせてインタビューを行った学生も見られた。

表2 インタビューの相手

	インタビューアとの関係	学生数（人）	回答者に占める割合（%）
1位	父親	40	36.0
2位	知り合い	19	17.1
3位	母親	15	13.5
4位	インターンシップ関係者	12	10.8
5位	友人	10	9.0
6位	兄または姉	6	5.4
6位	本キャンパスの教員	6	5.4
8位	叔父または叔母	5	4.5

青少年に保護者の仕事が見えにくくなっていると指摘されて久しいが、文部科学省の報告書では次のように述べる。「かつての子どもたちは、保護者の働く姿を否応なしに目にし、そこから多くのことを学んでいた。今日、そうした状況は大きく変化した。保護者の働く姿を見る子どもは非常に少なくなっている。こうした変化が子どもたちの勤労観、職業観をはぐくんでいく上で、大きなマイナス要因になっていることは、これまでも指摘されてきた」⁽²⁾。だからこそ、職業について普段あまり深くは話さない保護者へのインタビューは、具体的に職業を知ると同時に保護者の考え方を理解し、自らの職業観を考える手法として期待される。

また、インターンシップ期間中であつたため、初対面ながら、実習先のエンジニアにインタビューを行った学生が12人（10.8%）いた。インターンシップ参加者の20%近くが挑戦したことになる。就職活動をすぐに始めるか否かは別として、就業体験以外にも、高専卒として働くうえでの待遇の実態や開発の現場での体験談を知りたい思いがインタビューの動機になっていた。仕事内容ややり甲斐、一緒に働く人との関係性、企業の社風や文化を知るといったインターンシップ参加の目的にも通じるが、与えられた就業体験メニューで納得するよりも、自分から質問することで生の体験をより一層印象付けようとの強い意志が見られる。

インタビューの相手の職業では、会社員が最も多く84人（75.7%）であったが、そのうちエンジニアは31人（27.9%）であった。学生たちには、高専生の就職先に多い仕事を指定したり推奨したりしたわけではない。エンジニアと言っても仕事内容は多岐にわたり、ITエンジニア、システムエンジニア、フィールドエンジニア、電気工事エンジニア、土木エンジニア、建築士等々であったが、保護者の仕事であるエンジニアへの興味関心が高いことは、家庭の影響が強いことが伺える。

知り合いへのインタビューをした学生は、19人（17.1%）いたが、美容師を選んだ学生が4人いたのは意外であった。なかには、発表の準備が遅れ、新学期近くなって髪を切りに行つたついでにインタビューをしたと語った学生もいた。気軽に気楽に取り組んだ感が強いが、案外、対面に向かい合って話すよりも鏡越しに話す方が開放的に話せる心

理が働いたのかもしれない。この点は、視線を気にせずリラックスできるコミュニケーションの活用方法として注目される。

3.2 キャリアインタビューの形式

インタビュー形式は、対面式でも通信式でも可としたが、全員が、電話や電子メール、手紙・文書などの媒体によらず、直接対話によってインタビューを行った。

指定した質問項目は、①インタビューの相手の「氏名」、「性別」「年齢」、インタビュアーとの「関係」②職種と内容③仕事に就いたきっかけや動機④(あったら)入社当時の面接や試験内容⑤働く意味や仕事のやりがい⑥(あったら)転職の経験(職種と理由)⑦今後社会に出るインタビュアーへのアドバイスであった。直接対話を行ったため、質問項目を満たすだけではなく、質問事項①～⑦に限らず、話の流れから自然に、オリジナルな質問項目(保護者の職業選択に対する祖父母の反応、転職に際して会社や家族の反応など)を考えだす学生もいた。

3.3 キャリアインタビューの時間

インタビューに要した時間および発表資料作成の時間の合計は、次の通りである。()内は回答者に占める割合(%)

- 1 時間程度 (8.3%)
- 2 時間程度 (23.3%)
- 3 時間程度 (36.1%)
- 4 時間程度 (25.5%)
- 5 時間以上 (6.8%)

平均 2.8 時間で作成しており、学修単位の科目としての「自学自習時間」としては妥当であり、後に発表を伴うためにやりっ放しにならず、評価にも通じる。

3.4 キャリアインタビューの感想

キャリアインタビューは、保護者を含めた社会人と仕事の話をする機会づくりとしての役割を持つため、その意義は大きいと言えるだろう。学生自身の感想としては、「インタビューは難しかった」と感じた学生は3人に1人の31.5%であった。原因としては、人選の迷い、相手との交渉、時間の確保、聞き取りに伴う緊張や恥ずかしさ、事後に発表資料をまとめる面倒臭さが挙げられた。

しかし、インタビューの重要な目的に、キャリア意識の向上と、就職活動への意識向上があった。「インタビューの経験が自分の就職活動に役立った」とする回答は96名(86.5%)であって、否定的回答は15名(13.5%)に過ぎなかった。

否定的回答の主な理由は、「進学や留学を目的としているので就職を考える余裕が今はない」、「働く意味ややりがいへの回答がありきたりな返答で説得力や新鮮味がなかった」、「自分の言葉ではない感じがする」、「お金のためなら何でもせざるを得ないのに、キレイごとだけでは食べていけないはず」である。聞き飽きた言葉であっても、実際に行動に移すのは難しい。だからそれを実感させ納得させる

のは、インタビューを受ける側の話し方の問題であったかもしれない。お金を得る苦労話や感謝された場面などについてエピソードを交え具体的に語ることによって、さらにイメージは湧いたであろう。

「役立った」と肯定的な回答をした学生の感想は以下の通りである。

・今回キャリアインタビューを通じて、興味があった通信業界についてより詳しい事情を知ることができた。普段聞かないような業務内容や仕事に就いたきっかけも聞くことができたため、将来に向けて役立つと感じた。

・今回のインタビューを終えて、自分の進路とやりたいことを整理することができた。1年生の時から4年生までロボットを作り続けてきたが、自分にとってロボット作りがどういう意味を持っているのかを考えることは少なかった。今回、それを考えてみて、自分の中でロボット作りを続けていく意義と、目的がはっきりした。今後、たくさんの選択肢から進路を探すことになるが、ロボット技術者になる道を探したい。

・私は、今回のインタビューを終え高専での学校生活を見直してみた。今まで授業で専門的な知識について学習してきたが、実際得た知識をどのように応用するかなどいまだにわからない。そのため自分のものになっていないのに等しいということが納得できた。これからは授業で疑問に思ったことなどいろいろな知識を身につけて、自ら学習することで知識を自分のものにすることを実行していきたい。「実力が大事」という言葉の重みを感じた。

キャリア意識の向上以外での成果としては、親族との真面目な対話の嬉しさが挙げられた。「きちんと親も向き合ってくれて久しぶりにじっくりと話す機会になった」、「転職したことや今の仕事の詳細まで知らない内容が多いことに驚いた」、「ふざけているようにしか思っていなかった兄の意外な一面が見られた」、「アドバイスをもらえてうれしかった」などの声が寄せられた。

一方で成果発表は、自分の取材した事実と感じたことを広く人々に伝える機会づくりとして絶好の役割を持ち、その意義は大きいと言えるだろう。しかし、学生自身の感想としては、「成果発表は難しかった」と感じた学生は76.4%であった。主な感想は以下の通りである。

・シンガポールでの英語研修を終えて、人前に出での発表に耐性がついたとはいえ、いざ前に出るとやはり緊張で頭が真っ白になってしまった。しかし、話す内容を文章でなくポイントごとに押さえて覚えていたので、割とスムーズに発表することができたとは感じる。だが、はきはきとした発表はできていなかった。また、スライドの作りも簡素でやたら文字が多くなってしまい、次の機会では改善する。

・今回のスピーチで反省する点が2つあった。1つ目は、発表時間である。自分が伝えなかった内容をほとんど発表できたのはよかったが、長時間話してしまった。もっと要点を簡潔にまとめた発表をして、聞き手を飽きさせないよ

うにしたい。2つ目は、アイコンタクトである。今回の発表では、教室の片側の人としかアイコンタクトをできなかった。今後スピーチの機会があれば、もっと全体を見渡せるように意識しようと思う。

・今日のプレゼンを終えて反省点がひとつある。それは、もっと見やすいスライドを作るということだ。今回、私が使ったスライドは文字がとても小さく、見にくいスライドになっていた。発表している自分からしても、非常に使いにくいスライドだった。プレゼンで使う資料は普段作っているレポートとは違い、色使いや文字のフォントなどに気を付けなければならない。これからは客観的な視点でスライドづくりを心掛けたい。

学生が自らの発表を客観視して振り返り、改善の機会を持つことは大事であるが、授業の進行上、同じテーマでの発表は1回で終わってしまい、「次の機会」を与えられないのが現状である。授業担当者としては、発表の機会を多く作るように努めることは当然だが、学生には、他の学生の発表から得られた情報を元にして、「人の振り見てわが振り直す」観察眼を養う必要性も喚起する必要がある。

3.5 キャリアインタビューによる変化

キャリアインタビューと成果発表を終えて、当初の目的であった、①働くことについて関心を高め、自らのキャリア形成に貢献する、ことに対して意識の変化の有無を質問した。肯定的回答は102名（91.9%）であって、否定的回答は9名（8.1%）に過ぎなかった。

肯定的回答からは、インタビューを通して、大いに示唆を受けた学生も多かった。

・今まで自分は高専生がもっとも武器とすべきは専門科目だと思っていた。しかし、今は行動力こそ最大の武器とすべきではないかと思う。インタビューのなかで「自分の通った道に戻ってはいけない」とあったがまさにその通りである。専門ならば大学卒の方が強いのは当たり前だ。ならば、高専生は行動力で勝負すべきだと思う。つまり、自分の得た知識を確実にアウトプットして成果を得ていく方法を身に着け付け行くべきである。

・同じような仕事でも次は違うやり方でやるという考え方がいいなと思った。同じようなことを繰り返すのは退屈だと思う。特に私は飽きやすい性格なので違ったやり方でできないか考えるようにしようと思った。

・インタビューで心に残っている言葉は、「若いときにした失敗は取り返せることが多いから、若いうちから新しいことにどんどん挑戦するべきだ」である。夏に父にインタビューを行った際には、消極的で保身的と捉えられるような言葉を貰っている。しかし、私個人としては前者の意見を支持したい。なぜなら、人生は一度きりで、一度過ぎた時間は巻き戻せないからである。後になって後悔の無いように新しいことに挑戦したい。

この学生は父親とインターンシップ担当者に、2回インタビューを行っている。両者の比較により、保護者の処世

術と思われる受け身で無難な個人であるよりも、より積極的・主体的に自分のキャリアを形成しようと努めている変化がわかる。

キャリアインタビューにより当初の目的は達せられた印象は強く、キャリアインタビューが働くことへの意識を持たせる手法として役立つことは確かである。しかし、あくまでも心理的な側面に働きかけたに過ぎないことも忘れてはならない。学生が実際に就職活動を行い、進路を決定し、卒業後のキャリアを自ら作り上げるための力を身につけさせるのがキャリア教育であるという考え方に立てば、継続した取り組みがさらに必要とされる。

4. インタビュアーへの回答

4.1 働く意味や仕事のやりがい

インタビューで「働く意味や仕事のやりがい」について質問した。得られた回答文言をデータ解析し、共起ネットワーク図を作成したのが、図1である。

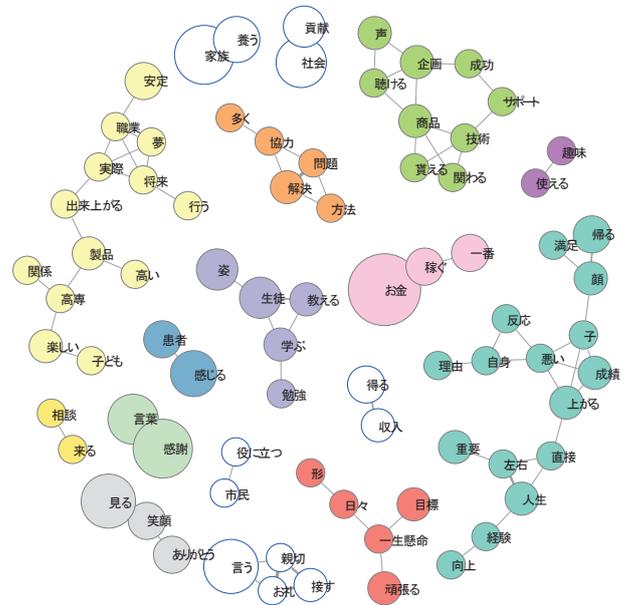


図1 データ解析結果（働く意味や仕事のやりがい）

円が大きいほど多く集まった語句であるが、「お金」・「家族」・「社会貢献」・「笑顔」・「感謝」が顕著であった。これらはつながり合って、働くことによって「お金」を得て「家族」を養い、「社会貢献」をし「笑顔」を助け「感謝」を受取り、働き続けることでさらに豊かになるという社会の循環を作っている。

「何が語られたか」は重要であるが、同じ言葉でも体験や経験した人によってさらに重みは変わって来る。「インタビューの経験が自分の就職活動に役立った」とした86.5%の学生は、「誰が、何をした」の話を聴くことで、「お金」・「家族」・「社会貢献」・「笑顔」・「感謝」の言葉から感じ取る重みの変化を感じたであろう。

14.0%→14.4%、「自分の才能や能力を發揮するために働く」と答えた者の割合の変化が8.9%→8.8%→7.8%→8.4%、「生きがいを見つけるために働く」と答えた者の割合が20.9%→21.3%→19.8%→19.9%となっている。

これらの回答をマズローの5段階欲求に対応させてみると、次のようになるだろう。

- ・「お金を稼ぐために働く」：「生理的欲求」と「安全欲求」
- ・「社会の一員として、務めを果たすために働く」：「社会的欲求」と「尊厳欲求」
- ・「自分の才能や能力を發揮するために働く」「生きがいを見つけるために働く」：「自己実現欲求」

内閣府の世論調査の結果は、年ごとに微妙な変化はあるものの、「自分の才能や能力を發揮するために働く」「生きがいを見つけるために働く」（自己実現欲求）が「社会の一員として、務めを果たすために働く」（「社会的欲求」と「尊厳欲求」）を上回っており、本インタビューとは異なる結果となった。

この原因としては、「社会の一員として、務めを果たすために働く」と答えた者の割合は、世論調査では、男性の50歳代から70歳以上で高くなっているが、本インタビューの回答者の81.1%が男性で、50代が55%を占めたからである。さらに世論調査では、管理・専門技術・事務職で高くなっているが、回答者の27.9%がエンジニアという専門職であることから首肯できよう。

成果発表では、学生の個人差がかなり大きかった。夏季休業中にインタビューをして、資料をまとめるため、学生は電子メール等で個人的に教師に質問するしかなかった。事前に文字の大きさや枚数、まとめ方に関する指導はより丁寧に行うべきであった。

取材を受けた側の反応はどうであっただろうか。特に、保護者にインタビューを行った際に、期待や思いがあるはずである。広報誌「熊本高専だより」に就職に臨む保護者の思いを掲載したり、学生と保護者、進路担当者で座談会を開いたりするなど、インタビュー後の企画も考えてみたい。自身の就職の時と変わらない古いイメージを抱く保護者に対して、新しい動きを伝える意義もあるのではないかと考える。

また、今回は直接対面でのインタビューであったが、いざ電子メールを活用した学生も出てくるかもしれない。インタビューに限らないが、メール作成上のマナーを事前に指示しておくことも必要となる。

今回のキャリアインタビューを通して、学生のキャリア形成の一助とするという目的はほぼ達成できたのではないかと思われる。次年度も引き続き実施することで、キャリアインタビューの手法をさらに充実させていきたいと考えている。

(平成29年9月25日受付)

(平成29年12月6日受理)

表3 内閣府世論調査「働く目的は何か」(平成28年)

	該当者数		お金を得る		社会の一員		自分の才能		生きがい		その他		わからない	
	人	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	
今回調査	6,281	53.2	14.4	8.4	19.9	※	4.1							
今回調査(6,192	53	14.4	8.3	20.1	※	4.1							
平成27年6	5,839	53.7	14	7.8	19.8	※	4.7							
平成26年6	6,254	51	14.7	8.8	21.3	※	4.2							
平成25年6	6,075	48.9	16.1	8.9	20.9	※	5.2							
平成24年6	6,351	51.1	14.8	8.8	20.8	※	4.6							
平成23年1	6,212	48.2	15.5	9.4	22.6	※	4.4							
平成22年6	6,357	51.6	14.8	9.1	20	※	4.5							
平成21年6	6,252	51.9	13.3	9.2	21.7	※	4							
平成20年6	6,146	50.1	13.9	9.9	22	※	4							
平成19年7	6,086	49.4	14.1	9.6	22.2	1	3.7							
平成18年1	5,941	49.7	13	9.6	23	1.6	3							
平成17年6	6,924	53.7	11.5	7.6	19.8	1.7	5.7							
平成16年6	7,005	51.7	11.7	9.9	20.3	0.5	5.9							
平成15年6	7,030	49.5	11.7	9.6	22.5	1.3	5.5							
平成14年6	7,247	52.8	11.1	10.7	20.9	0.7	3.8							
平成13年9	7,080	49.5	10	9	24.4	1.7	5.4							

6. まとめ

本稿は、キャリアインタビューという手法の有効性を検討するため、本キャンパスでの実践を報告するとともに、課題を体験した学生へのアンケート調査の結果を分析し、考察を行った。全体的な結果として、この手法は少なからず学生自身のキャリア意識に変化をもたらすことができたと言えるだろう。キャリアインタビュー手法の有効性が確認されたものと考えている。

今後、このような手法は様々な段階でのキャリア教育に活用されるべきと考えるが、以下、今後の検討事項が明らかになってきた。

参考文献

- (1) 草野美智子：「キャリア教育へ〈国語の授業方法からのアプローチ〉」熊本高専「研究紀要」第7号(2015)
- (2) 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」第4章キャリア教育を推進するための条件整備 2保護者との連携の推進（平成16年1月28日）
http://webcache.googleusercontent.com/search?q=cache:RJuOsrqIAaYJ:www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/005.htm+&cd=3&hl=ja&ct=clnk&gl=jp (2017.8.17 閲覧)
- (3) 「自己実現理論 - Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E5%B7%B1%E5%AE%9F%E7%8F%BE%E7%90%86%E8%AB%96> (2017.8.18 閲覧)
- (4) 内閣府世論調査「国民生活に関する世論調査」「働く目的は何か」(平成28年7月) 分析<http://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-life/2-3.html> グラフ <http://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-life/zh/z23-2.html> (2017.8.18 閲覧)